

有松紋りに見る伝統工芸の歴史的変遷

上田 香

論文要旨

愛知県名古屋市緑区有松地区の「有松紋り」は、旧東海道を行き交う旅人に土産物として販売したのが起源とされる約 400 年の歴史を有する伝統工芸品である。時代に即した製品を目指し技術開発、商品開発を続け、数百に上る多くの紋り技法を生み出してきた。古くは手ぬぐいや手綱に始まり、着物、浴衣、襦袢に展開され、現在では、ファッション、インテリア雑貨にいたるまで幅広い商品に応用されている。伝統工芸品の中で、有松紋りの様に多くの技法が開発され、継続的に改良されてきた例は希である。

本稿では、有松紋りの技法、意匠、生産体制が、地域の中で時代の変化に対応して、どのような変遷を遂げたのかを、浮世絵調査、海外現地調査等の異なる手法を用いて分析、検証し、明らかにした。伝統工芸の歴史的変遷を、技法、意匠、生産体制の多方面から研究することは、多くの伝統工芸の今後の維持、保全を考える上で意義深いと考える。

第一期（創業期：江戸時代初期）

創業期は独自の技法はなく、短時間で括れる簡単な技法と簡素な意匠に限られていた。その後、各地の紋り技術を積極的に取り入れ、紋り技法のみならず、染色法や製品の用途に至るまで、様々な試行錯誤を繰り返した。その中で、最初に取り入れられたのは蜘蛛紋りの原型（きしゃご紋）であった。その後、豊後紋りの産地から来た三浦玄忠の妻により伝えられたとされる三浦紋り（むきみ紋）、徳川家へも献上された手綱に使われたとされる手綱紋り（鋳紋）などの技法が用いられるようになった。

第二期（隆盛期：江戸時代中期、後期）

江戸時代特有の文化が花開き、三浦紋りや白影紋りなど素朴でありながらも技術や時間を要する技法、意匠が流行する。また、紋り染めに限らず、多くの染織技法が広まったことにより、違う色や柄を重ねて用いられる様になった。「赤い麻の葉模様の鹿の子紋り」の襦袢と小紋の着物を合わせるなど、有松紋りは様々な用途に使われ、技法、意匠のバリエーションが増え、有松紋り独自の精緻な技法が確立される。更に、浴衣等で襲取り蜘蛛紋り等の技法自体が大柄な意匠も流行した。尚、第一期に既に制作されていた三浦紋りが、第二期の後半になり江戸で流行したことも明らかとなった。三浦紋りは括りに時間がかかる技法であるが、総鹿の子紋りが高級品として禁止されていた時代に、大胆な柄を繊細な地模様で彩る三浦紋りは時代の流れに合致した。この流行により、有松紋りは名声を高め、生産量を拡大すると共に、独自性を確立していく。

第三期（革新期：明治、大正時代）

尾張藩の庇護がなくなり、営業独占権が奪われたため、新規技法開発に力を注ぎ、嵐紋りを始めとする世界的にも類を見ない器具や機械を用いる斬新な技法が数多く開発された。新技法により一反当たりの生産時間は短縮され、絵柄が少なくなり、幾何学模様が増え、単価の安い紋り染め製品が庶民に普及する。いわば、紋り染めの「産業革命」といえる。中でも、嵐紋りは、この時代に大流行した技法で、百種類以上の技法があったと伝えられており、男性用浴衣や生活雑貨等に広く用いられた。なお、嵐紋りは、従来の女性の括り手を中核とした「女性内職方式」の生産体制と異なり、「男性工場方式」で生産された。生産体制の異質さが、戦後の人手不足による嵐紋り等の新技法の消滅につながった。

第四期（海外生産委託期：昭和時代）

最盛期には愛知県内に約10万人いたとされる括り手も、戦後の人件費の高騰と人手不足により激減した。括り手を海外に求めざるをえない状況に追い込まれた有松は、海外生産委託を開始する。特に有松絞りに大きな影響を与えたのは、少数民族（ペー族）により古くから絞り染めが行われていた中国雲南省への生産委託であった。1980年代より始まった中国雲南省への生産委託により、有松絞りの精緻さが失われ、意匠的にも有松絞りのオリジナリティーを損なう日中ハーフ化を招く結果となり、その製品が土産物として有松の街角にならぶ事態となった。

第五期（現代）

多くの技法で後継者が育たず、既に括り手がない技法や、括り手がいても高齢の場合が多く、制作可能な技法は激減している。このような背景から、若手デザイナーの新商品に用いられる技法は、短時間で括ることが可能な手蜘蛛絞りや板締め絞り等の創業期の簡素な技法に回帰している。一方では、手間のかかる技法を用いた高級品を海外生産委託に頼ってでもなんとか守っていこうとする動きもあり、町並み保全による観光地化、海外進出を含め模索が続いている。

伝統は革新の連続と言われるが、有松絞りの技法、意匠、生産体制も、時代に合わせて、時代を乗り越えるために、劇的に変化を遂げてきた。

本研究が、多くの伝統工芸の維持、保全の一助となり、有松絞りも現代の苦境を乗り越えると望みたい。